

霊山と癒し

— 中国の南岳をめぐる —

加藤 國安

筆者は先に、天台山と孟浩然・李白の関係について論じた¹⁾。拙論では、さらに歩を進めて、中国の代表的な聖地・南岳巡礼について見てみたい。南岳の歴史は数千年にも及ぶ。文献的にも膨大なものになる²⁾。今回は、とくに日本と南岳との関係、および唐代の詩人杜甫と南岳という点にしぼって述べたい。

一 南岳慧思の「転生」譚と聖徳太子伝説

一 四国遍路と中国の南岳巡礼を結ぶ契機として

ご承知のように、わが四国遍路の元祖・衛門三郎は、長い巡礼の旅のあげくに「罪」が消え、死後「転生」して伊予の領主・河野家の男の子に生まれ変わり、15歳で家督を継ぎ、善政をほどこしたと伝えられている。

中国で、この「転生」の有名な例をあげるならば、南岳慧思^{なんがくえし} (515-577) という人物がいる。南岳慧思は、これまでの仏教界の考えと合わず激しい迫害に遭い、何度も毒を盛られるが、そのつど奇跡的に生き返ったことから、慧思は不死身という伝説が中国で生まれ、世代を超えて「転生」していったという話が展開する。これは中国の『続高僧伝』に記載されている。

この南岳慧思をととても尊崇したのが、あの鑑真^{かんじん}である。鑑真が南岳慧思を非常に尊崇していたということ、これについては様々な記録や遺物が残っている。そういう鑑真が、天平勝宝5年(753)12年もの歳月をかけて、やっと日本に漂着するわけだが、そこまでして鑑真を東海の向こうの国に駆り立てたのは、何だったのか。日本の僧侶の懸命な依頼があったのは事実だが、それだけではない。もっと別の要因もあったのである。

これまでの日本の学者の主な例—たとえば小野勝年^{かなし}・金治勇・福井康順先生など—では、鑑真は南岳慧思が聖徳太子に生まれ変わっていると信じて、日本までやってきたというふうに理解してきた(これを「鑑真、聖徳太子敬慕説」という)。

これに対して、近年、異論を唱えているのが、中国の杭州の王勇氏である。王勇氏は、浙江(旧杭州)大学日本文化センター教授で、かつて日本の国際日本文化研究センター客員助教授を務められた。『聖徳太子時空超越—歴史を動かした慧思後身説』³⁾が、王勇氏のその著書である。2年前、我々愛媛大学中国巡礼研究チームは、この王勇氏を中国の杭州に訪ね、学術交流を行った。王勇氏は鑑真渡日の背景を次のように考えている。すなわち、鑑真が聖徳太子を敬慕して来日したというこれまでの解釈は、日本の学者の美しい願望である。『唐大和上東征伝』では、鑑真の発言として「南岳思禪師は遷化の後、生を倭国の王子に託して」とのみ記し、聖徳太子とは述べていない。鑑真和上の言葉の中で、はっきりしているのは鑑真が「南岳の慧思後身説」を信仰していたということだけなのだ。

さらに王勇氏は、次のような資料も掲げてこういう(筆者による要旨)、

「大唐国衡州衡山道場釈思禪師七代記」(碑末に、「開元六(718)年歳次戊午二月十五日」の奥書)に、南北朝で六回生まれ変わり、第七生は「倭国の王家」に転生。開元六年は、718年にあたり、鑑真

渡日の24年前になる。このことは、この碑文を日本人僧が筆写して持ち帰り、『奈良遺文』などに記録されている。

つまり王勇氏は、鑑真はこの永遠不滅の南岳慧思を深く信仰して、その南岳慧思が倭国でも転生しているというので、ぜひ倭国に行こうと思ったのだ。したがって、その転生者が聖徳太子だからそれを慕って渡日したのではないという。これは記録を見るかぎり、まったくその通りである。

では、いったいどうしてこのような「聖徳太子は南岳慧思の生まれ変わりだという説」が生まれてきたのだろうか。

じつはこの話は、もう奈良時代にはかなり流布している。ことの発端は、鑑真の直弟子思託しだくがこの説を説いたことに起因する。それがやがて平安朝の太子信仰を形成し、『聖徳太子伝暦』(延喜17年 917)になると、聖徳太子がその前身において南岳衡山で修行したという記述がなんと10回も登場。また聖徳太子が小野妹子に命じて、南岳へ仏典を取りに行かせたという話まで生まれてくるのである。つまり「聖徳太子は南岳慧思の生まれ変わりだという説」は、後世、日本でどんどんふくらんでいった伝説であって、そもそもそういう話は中国には存在しない。

だいいち南岳禅師が没したのは577年で、その時聖徳太子はもう生まれていて四(六)歳になっているから、これでは「転生」になるわけがない。この矛盾については、平安末期にはすでに問題視されていた。にもかかわらず、「聖徳太子は南岳慧思の生まれ変わりだという説」が通説として広く通ってきたのは、それは日本人の美しい誤解だと、王勇氏は述べる。これを私なりに言い換えると、史実の問題ではなく、一種の日本人の太子信仰なのだと思う。これまでの日本人の学者の解釈は、この信仰の上へのっかり、後世作られた聖徳太子伝説の資料を、時代的に繰り上げて資料として用いたために、こういう解釈になったのだと思われる。

日本人には篤い聖徳太子信仰というのがある。また中国には中国でこれまた篤い南岳慧思信仰というのがある。両者はもともと別々のものだったが、これが鑑真の来日、そして異国日本での困難な布教活動を契機として一つにつながり、鑑真和上は聖徳太子を慕って来日したのだという伝説が生まれたのだらうと、私も王勇氏と同様に考える。

この慧思の生涯だが、はじめに述べたように、仏教界の激しい迫害に遭っている。そしてたびたび毒を盛られるのだが、不思議にそのたびに生き返り、のちに南岳に移って天台大師智顛ちぎんをはじめ多くの弟子を養成し、南岳大師と呼ばれるようになる(63歳で入寂)。

この奇跡から、慧思=不死身伝説が生まれる。これは中国の「続高僧伝」に明記してある。やがて慧思が中国で転生を重ねるうちに、舞台はついに外国へ移り倭国の王子へ、さらに聖徳太子へ「転生」したという伝説が広がっていく。こうして南岳慧思は、日本人の篤い聖徳太子信仰とも結びつき、日中を舞台に活躍する不死身のスーパーマンへと変貌していったのである。

冒頭で述べた四国遍路の話に戻るが、この四国は衛門三郎の「転生」説話が有名である。また道後温泉は聖徳太子とのご縁もある。一方、中国で有名な「転生」説話といえば、南岳慧思の話である。南岳というのは、中国の代表的な「転生」説話が生まれた聖地である。また南岳慧思転生伝説には、聖徳太子も絡んでいるということで、四国と中国の巡礼をつなぐ一例として紹介した次第である。このご縁をもとに、南岳慧思の不死身パワーをもらい、四国お遍路も永遠であれと、応援歌を捧げたい。

二 南岳・衡山とはどんな霊山か

南岳は日本にとっても重要な聖地だということを確認した所で、少し南岳の名所めぐりをしたい⁴⁾。この衡山は中国の南部の湖南省にある。南岳衡山というのは中国の五岳の一つで、数々の寺院・廟観が存在し、2000年の歴史がある。南岳には七十二の峰々があり、最高峰は祝融峰で標高1290mあり、つねに雲海で覆われている。伝説によると、祝融は火の神で、火種を保管。祝融峰は祝融の居住地であり、また死後の埋葬地でもある。頂上に祝融殿があり、これは明代の万暦年間（1573～1619）に建てられたものである。

主要な史跡としては、南岳大廟がある。これは五岳のなかでも完璧に保存された古い建築で、唐代の開元13年（725）に建てられている。衡山の南麓にあり、五岳のなかでも完璧に保存された古建築である。寺院は唐代の開元13年に建てられ、清代の光緒8年（1882）に再建。正殿は南岳大廟の中心建築であり、南岳大帝祝融の像を祭る。殿の高さは22m、衡山の72峰を象徴する72本の石柱に支えられている。また南岳大廟は衡山への観光の出発点でもあり、ここから、中路、東路、西路三つのコースがある。

南岳大廟から7.5キロ離れた所には、半山亭がある。ほぼ祝融峰の頂部の真中にあるため、半山亭という名になった。南北朝時代に建てられ、標高650mの所にある。鄴侯書院は、唐代の名相李泌が鄴侯に封じられ、衡山の福巖寺の後ろの端居室に隠居したことで、死後、息子の李繁が父親を記念するため、南岳大廟の左側に南岳書院を建立したものである。李泌は奇人で半官半民の生活をし、時に現れ時に隠居。智慧に富み、様々な奇策を出し、国に大きな貢献をし、鄴侯に封じられた南宋時代、書院は集賢峰の下に移され、鄴侯書院と命名。現在の建物は、1922年に再建されたものである。水簾洞は、南岳大廟の東北4キロの所にあり、紫蓋峰の下にある。滝は70mの高所から真下に飛び、大変壮観。衡山の四絶の一つである。

蔵経殿は、祥光峰の下にあり。南朝の陳の光大2年（568）に建立。明代初期、殿内に明の開国皇帝朱元璋から賜った「大蔵経」を収蔵していることで有名である。蔵経殿の周辺は峰に囲まれ、古木が高くそびえ立ち、衡山の四絶の一つとなっている。また方広寺は、衡山の奥地の蓮花峰の下にあり、磨鏡台の西6.5キロの所にある。方広寺は南朝の梁の天監2年（503）に建立され、明の崇禎年間に再建。現在は正殿、主帥殿などしか残っていない。寺院の開祖慧海大師が袖を洗い、衣裳を補った所とされる史跡あり。南岳の第一景勝といわれ、その深さは衡山の四絶の一つである。寺のそばにある二賢祠内の嘉会堂は、南宋の朱熹、張拭が一緒に南岳を遊覧したことを記念するもの。また寺の近くに統夢亭あり、これは清代の思想家王夫之の隠居地。寺の左側の上方の獅子山に石澗潭があり、天然の巨石がある。

衡山には寺院が多く、このほか有名な寺院として福巖寺、南台寺がある。福巖寺は規模が大きく、「南山第一古刹」。寺の右側に樹齢1400年の銀杏あり。また南台寺は六朝に建てられ、1400年の歴史あり。日本の仏教の流派の曹洞宗は、石頭希遷せきとうきせん禪師ゆかりのこの南台寺を開祖の寺院とする。

ところで、この南岳が歴史的にどう見られてきたのかというと、まず神話時代だが、西王母が上元夫人とともに南岳・朱陵山を造った（漢武帝外伝）話や、西王母が南岳の魏夫人に「玉清隱書」を授けた（集仙伝）話などがある。ついで南北朝時代では、「南岳の九仙」（陳興明・施存・尹道全・徐靈期・陳慧度・張曇ちん・張如珍・王靈輿・鄧郁之）の活躍がある。彼らはいずれも南岳で修行し、昇仙した者たちだ。さらに前述のように南岳慧思の活躍がある。

続いて、唐代では宋之問・陳子昂・王勃・王維・玄宗皇帝・道士の司馬承禎しょうてい・李白・孟浩然・杜甫・韓愈・柳宗元・劉禹錫・孟郊ら40名ほどの詩が残存する。また四十余の宮観が林立するなど、中国史上、最盛期にあたる。中でも重要なのが、司馬承禎（646～735）である。彼は智顛（中国の天台宗の創始者 天台大師 538～97）の強い影響を受け、仏教色の濃い道教哲学を樹立。中国全土を旅して回ったが、南岳にいたのが最も長い。開元12（724）年、天台山より南岳に移り、開元23（735）年、89歳で遷化している。司馬承禎著

「天地宮府図」は、10大洞天、36小洞天、72福地について記したものだが、この中、南岳にある聖地は四カ所ある。

第3小洞天 「南岳衡山洞」(名曰朱陵洞天)

第24福地 「青玉壇」(在南岳祝融峯西) …明の盧仲田「游人多好奇探検…」

第25福地 「光天壇」(在衡岳西源頭) …唐の僧道標・同齊己・宋の朱熹・明の劉堯誨らが訪問。

第26福地 「洞靈源」(在南岳招仙觀)

以来、ますます南岳は有名な靈山になっていく。

三 南岳を詠んだ最も有名な詩人 — 杜甫

この他、唐の文献で南岳を記すものとしては、「衡山記」(李明之撰)、「南岳小録」(李冲昭撰)、「衡山記」(范陽盧撰)、「南岳記」(釈章安撰)がある。南岳を詠んだ歴代の詩人の中でもっとも有名なのは、杜甫である⁵⁾。杜甫はこの南岳で名作「望嶽」「朱鳳行」などを残している。

大暦2(767)年頃より、杜甫は南岳参拝を思い、徐々に南下、南岳へ向かう。その時の心情をうかがわせる作品に、次の夔州^{きしゅう}にての詩がある。

「昔遊」
その昔 現代の華蓋君(王子喬)
ともいうべき さる道士に謁し
深く洞府の根源を求めた
けれども その方は亡くなられ
天に昇ってしまわれ
白日の光も また寂しそうだった

日暮れに 東北の峰の頂に登ったら
その方の頭巾や脇息は
まだそのままあったけ
そして弟子たち 四五人が
入ってきて 涙を落としていたものよ

余はあの頃 天下の名山に遊ばんと
まずは この遠き谷を訪ねたが
この道士とのよき面会をという
かねての願いは ほごになり
悲しい気持ちを抱いて
空に向かっていたっけ
…
翌朝 谷川のそばを通ると

「昔遊」(『杜詩詳注』巻20)
昔謁華蓋君
深求洞宮脚
玉棺已上天
白日亦寂寞
暮升良岑頂
巾几猶未卻
弟子四五人
入來淚俱落
余時遊名山
發軔在遠壑
良覲違夙願
含悽向寥廓
林昏罷幽磬
竟夜伏石閣
王喬下天壇
微月映皓鶴
晨溪響虚駛
歸徑行已昨
豈辭清鞋胝
悵望金匕藥
東蒙赴舊隱

いたずらに 速く流れていた
今度は 昨日歩いた道を
戻らなければならぬ
草鞋履きの足に たこができるのは
いといはせぬが
道士が金のさじで盛る
仙薬のことがうらめしかった

尚憶同志樂
伏事董先生
於今獨蕭索

その後 余は
山東の蒙山に赴いた
同志・李白との楽しい思い出は
今もこの胸に

あの時余は 董先生にお仕えしていたが
今では すっかり自分ひとりよ

この詩で、二つのことを取り上げたい。まず一つめ。「尚憶う 同志の楽しみ」という「同志」とは、その日、ともに楽しんだ李白のことを指す。詩は、天寶3（744）載、李白と行動をとともにし、河南省を中心に旅遊をしていた昔を思い出してのものである。この天寶3年というのは、李白が道教にかなり熱心だった時で、杜甫もその熱気に巻き込まれていた。このように、杜甫は往事、道教の名山に登ったことを懐かしみつつ、南岳への道をたどったのである。

次に二つめ。この杜詩の「伏事董先生，於今獨蕭索」だが、従来はたとえば『杜詩詳注』「憶昔行」注に、南宋・王象之「輿地紀勝」から引いて、これは董奉仙なる人物だとして、次のように指摘する。

「輿地紀勝」：董奉仙、天寶中、九華丹を衡陽に修め、朱陵洞の後洞に栖む。

ただ王象之（生没年不詳）は、寧宗の慶元2（1201）年の進士である。文献的にもっと遡れないのか。管見の限りではこれまで指摘がないが、唐の南嶽道士・李冲昭「南嶽小録」（欽定四庫全書 史部）を調べてみると、「唐朝得道人」の項に、在嶽十四人の得道の人物の名が列挙される中に、

董先生秦仙、大歷元年十一月六日得道。

とある。董奉仙はこの董先生秦仙ではないのか。

李冲昭は生没年不詳とされているが、「南嶽小録」には「時に壬戌歳冬十月序」とある。壬戌の歳に当たるのは、徳宗の建中3（782）年、武宗の会昌2（842）、昭宗の天復2（902）年などがあるが、ただ「南嶽小録」の「唐朝得道人」の項に記される道士で、もっとも遅い人物は、

広成劉先生玄静、大中五年五月十一日、得道。

である。この大中5年というのが、宣宗の851年になる。したがって、李冲昭は晩唐の人物で9世紀～10世

紀にかけての人物であることが分かる。文献的には、この「南嶽小録」の方が重要である。

この董奉（秦）仙らしき人物は、杜詩にもう一例登場する。大暦3年、出峽後の作かとされる。

「憶昔行」（『杜詩詳注』巻21）

仙人の秘法や 大切に隠された文書を
得るには ひそかな伝授が必要
このように年老いては
どう工夫すれば 願いを果たせるやら

秘訣隠文須内教
晩歳何功使願果
更討衡陽董鍊師
南浮早鼓瀟湘柁

（しかし 諦めきれぬ）

さらに 衡陽におる道士の董鍊師を
訪ねて 教を乞わん
南の方 瀟湘地方に
舟を浮かべ 早く舵を動かしたし

秘訣 隠文 内教を須つ
晩歳 何の功か 願をして果たさしむ
更に討む 衡陽の董鍊師
南浮 早く鼓せむ 瀟湘の柁

現在、この董奉（秦）仙と「衡陽の董鍊師」とは同一人物というのが一般的だが、ただ資料的にはこれだけの記述にすぎず、確証といえるほどのものではない。仮に同一人物とすれば、蒙山より南岳に移り住んでいたことになる。委細は不明だが、杜甫はこの衡陽の董奉（秦）仙に会って道教を学ぶべく南下して行ったのである。

では、「昔遊」の続き及び「望嶽」詩を見てみよう。

余はどうして 夔州の関塞で
旅人になぞ なっているのだろう
余はなぜこんなに 道士への志を
長らく忘れていたのだろう
妻や子とは いったい何なのか
道士にならんという
かつての願いに背いてまでも…

胡為客關塞
道意久衰薄
妻子亦何人
丹砂負前諾
雖悲髮鬢變
未憂筋力弱
杖藜望清秋
有興入盧霍

髪の毛が白くなったのは 悲しいが
筋力が弱ったことは 憂えてない
この清い秋 杖をつき
南の廬山や衡山に 行ってみたい
そんな気持ちは まだあるよ…

胡為れぞ 関塞に客と為りて
道意 久しく衰薄なるや
妻子 亦た何人ぞ
丹砂 前諾に負く
髮鬢の變ずるを悲しむと雖も
未だ筋力の弱きを憂えず
藜を杖いて 清秋を望む
興の廬霍に入らんとする有り

「嶽を望む」

「望嶽」（『杜詩詳注』巻22）

余は俗事にひかれ なお旅の空
 杖ついて 南岳にお詣りする暇なし
 帰り道には ぜひ駕を命じ
 齋戒 沐浴して 御廟で休息せん

 深いため息をもって
 この衡州の長官に お尋ね申す
 あなたは どうやって
 今の政治を助けていこうと されるのか

けんぱく しゅうと かぎ
 牽迫 脩途に限らる
 いま しゅうこう つえ いとま
 未だ崇岡に杖づくに暇あらず
 きらい ねが が めい
 帰来 覬わくは 駕を命じ
 もくよく ぎよくどう やす
 沐浴して 玉堂に休まん
 さんたん ふしゅ と
 三嘆して 府主に問う
 なに もつ わが こう たす
 曷を以てか 我が皇を賛けん
 せいへき すいぞく しの
 牲璧 衰俗に忍べば
 かみ そ こうしやう おも
 神 其れ降祥を思わんや

聖地南岳での杜甫の祈りは、何よりも国家の再生だった。この作品からすると、聖地南岳には心身を清める施設があり、廟で祈りを捧げたことが分かる。

そして杜甫は、「朱鳳行」(『杜詩詳注』巻23) という南岳での詩で、

君見ずや
 瀟湘の山の中でも
 ひときわ 衡山が高いのを
 その頂で 朱鳳がうるさく鳴いている

 身をそばだて 首を伸ばし
 顧みながら 仲間を求めている
 力なく翼を垂れ 口もきけぬほどに
 心はいたく 疲れ果て
 (なぜかといえば)
 俗世間の方じゃ もろもろの鳥たちが
 網に引っかかり 苦しみ
 また最も小さい雀さえも
 逃げられないのを 気の毒に思っじゃ

 (彼らばかりじゃない)
 願わくば おケラやアリにも
 自分の食べ物 竹の実を分けてやりたし
 トンビやフクロウのごとき奴らを
 のさばらせているのは 我慢ならぬ

君不見瀟湘之山衡山高
 山巔朱鳳聲嗷嗷
 側身長顧求其曹
 翅垂口噤心勞勞
 下惑百鳥在羅網
 黃雀最小猶難逃
 願分竹實及螻蟻
 忍使鷓鴣相怒號

 きみみ しやうしやう やま こうざん たか
 君見ずや 瀟湘の山 衡山の高きを
 さんてん しゅうこう こえごうごう
 山巔の朱鳳 声嗷嗷たり
 み そばだ ちやうこ そ そう もと
 身を側て 長顧して 其の曹を求む
 つばさた くちつぐ こころらうらう
 翅垂れ 口噤みて 心勞勞たり
 しも あわれ ひやくちやう らもう あ
 下は惑む 百鳥の羅網に在るを
 こうじやく もつと しやう な のが がた
 黃雀 最も小なるも 猶お逃れ難し
 ねが ちくじつ わ ろうぎ およ
 願わくは竹實を分かちて 螻蟻に及ぼさん
 しきやう あいごごう しの
 鷓鴣をして 相怒号せしむるに忍びんや

と、悲嘆にあえぐこの世を救済しなければならないという。個人の魂の救済よりも天下国家が優先するというのが、杜甫の基本的な姿勢である。中国では、聖地は人間個人の祈りの地ばかりでない。国家の運命の平安を祈願する土地でもある。とくに杜甫はこの天下国家を大切にする姿勢が顕著だ。そこに杜甫の生き方、また杜甫の文学の大きな特色がある。

心身的に疲弊のきわみにあった杜甫だが、霊山のもつ聖地力や神話力にあらたな力を得て、国家の再生や

自己の安寧の祈願を詩につづった。それは杜甫の最後の光芒を放つものとなったのである。

おわりに

中国の聖地巡礼について、きわめて概括的な理解だが、筆者の考えを掲げてみる。中国の宗教は主として出家の形態によって行われており、その歴史には盛衰の波はあるけれども、各聖地・寺廟などにおいてはかなり深い信仰生活（感謝・祈願・懺悔・贖罪など）を实践、それは『大蔵経』『道蔵』所収の膨大な教義論としてまとまっている。それはほとんど現地の寺院で営まれ、巡礼という移動形態それ自体に重きをおいて信仰を求めるものではなかった。しいて旅と関連づけると、中国の文人たちがそういう聖地に寺院や高僧・道士などを訪問、その折のことを詩文に残してきた。その結果が、上のような多数の詩文や紀行文となったのである。

ただしこのような文献には、自己の精神的慰藉や静かな山水の趣が描写されるのが主で、庶民の宗教活動や習俗は記載されない。中国の宗教活動は、歴史的に見てかなり政治的な統制下にあり、政治的社会的な外に、個人の精神的自由を求めることは、文人官僚や出家の僧侶・道士ならともかくも、庶民にはきわめてむずかしかった。聖地・霊場の巡礼（山水・史跡めぐり目的も含む）は、ごく限られた階層の人々のものだったといえる。この辺が日本や西洋の在家庶民による聖地巡礼と異なる点である。いずれにせよ、中国のこの種の聖地巡礼の研究は、日中双方ともまだこれからという状況であり、その第一歩として小論を報告する。

注

- 1) 「李白の天台山・天姥山の詩—自由な魂の飛翔 (1)」(『愛媛大学教育学部紀要』第36巻1号 03)、「同一自由な魂のありかを求めて (2)」(『愛媛大学教育学部紀要』第36巻2号 04)、「孟浩然と天台山—霊山での至高経験」(『東洋古典学研究』第18集 04)を参照。
- 2) たとえば、『南岳志』(湖南省地方志編纂委員会 湖南出版社 96)は、南岳の地理・景勝、石刻、祠廟、宗教、旅游、人物、芸文、文献、史料などに関するものを網羅したもの。また『南岳区志』(南岳区地方志編纂委員会 岳麓書社 00)は、自然環境、政治・経済のほか、旅游、文化、社会、宗教、人物、叢録などの項目に分けて、これも網羅的に編修している。また学術討論会の報告を編修したものとして、『道教与南岳』(湖南省道教文化研究中心編 岳麓書社 03)が近年、刊行されていて有益である。
- 3) 王勇著『聖徳太子時空超越—歴史を動かした慧思後身説』(大修館書店 94)
- 4) 注2)の『南岳志』『南岳区志』を参照。
- 5) 杜甫の南岳に関する論文では、
呉明賢「杜甫《望岳》之比較」、劉友竹「《昔游》《憶昔行》的注釈和系年」(『杜甫研究學刊』1988-3)、
王徳亜「論杜甫《望岳》詩中之“望”—以望南岳為例」(『杜甫研究學刊』2003-2)、
蔡丹君「杜甫赴南岳尋道考」、王徳亜「入衡訪道是杜甫滯湘的主要原因」(前掲『道教与南岳』)などを参照。